講評

高松キャンパス
一般教育科　長原 しのぶ

高松キャンパスにおける平成26年度夏休み課題文の提出は合計579篇でした。読書感想文が111篇、千頁読破記が203篇、体験文が265篇です。4年生以下に提出を課す課題文ですが、5年生以上からの応募も受け付けています。国語の宿題だから出さなければという気持ちではなく、作品発表の場としてより多くの学生に活用してほしいと思います。

さて、全579篇の中から今年も入賞作品が選ばれました。いずれも読みごたえのある素晴らしい作品です。

読書感想文優秀賞は山田季美佳さんの「世界一の職人が教える仕事がおもしろくなる発想法」（岡野雅行著）です。この本は、エンジニアである筆者が自分の体験を通して働く姿勢を示したものです。そこから山田さんは仕事に限らず、何事も「楽しむ」「挑戦する」という探究心の大切さを学び取りました。この本との出会いにより、これまでの自分は新しいことへの挑戦から逃げていたのではないかと気づいています。本を読んで「面白かった」「悲しかった」と表面的に感想をまとめるのではなく、本が自分に刻み込んだ痕跡をしっかりと伝えている点は高く評価できます。他人と自分は違うのだから教養本は無意味だと読まずにいた山田さんですが、この一冊を選んだこと自体が新しい挑戦に繋がったと述べています。自らの手で世界を広げる第一歩になったと思います。

佳作の城井智弘くんは「芸人交換日記」（鈴木おさむ著）を読んで、夢を持つことの大切さと夢を実現させる難しさを感じ取っています。追い続けた夢が叶わないと分かったとき、果たして自分は夢を諦められるのかと自問自答しながら読み続ける姿がうかがえます。答えは出ていません。しかし、城井君が真摯に本と向き合い、自分の夢について深く考えたことがよく伝わってきます。

千頁読破記優秀賞は安丸怜那さんです。読破したのは数学に関する本です。千頁読破記は、千頁以上の分量を読み切ると同時に、読む行為を通して何を得たかを明確に打ち出すことが重要です。本作品は、計算が嫌いで数学の応用問題の苦手な安丸さんが、あえて数学に戦いを挑み、新たなアプローチを獲得する過程が見事に描かれています。最後に示した「数学は生きている」という言葉が印象的です。安丸さんの到達した数学との付き合い方は、単純に公式を暗記して決まっている答えを導きだす行為に虚しさを感じている人にとって新しい視点を与えるのではないでしょうか。

佳作は山本尚幸君です。対象を自己啓発本に絞り、合計10冊、2293頁を読んでいます。多くの本を読んだ場合、ついつい個々の感想を述べたくなります。しかし、山本君は全ての本が持つ共通性に注目しています。このように、読破した作品群を大きな塊で捉えていく方法は文章全体を一つにまとめるうえで非常に有効です。今回の読書体験が理想とする人間像のイメージ獲得に繋がったという感想も説得力を持ちます。

夏休み体験文優秀賞は村上恵実さんの「踊る阿呆に見る阿呆」です。体験文ですが一篇の小説を読んでいるような面白さがあり引き込まれました。ずっと「踊る阿呆」であった村上さんが初めて「見る阿呆」として阿波踊りに関わった体験が生き生きと描かれ、自分の成長を少し寂しく感じながらも変化を受け入れて前進していこうとする強さがよく出ています。体験文は時系列に出来事を並べるだけでは日記のようになってしまいます。何をしたかの説明にばかり字数を使うのではなく、体験内容から伝えたい「何か」が浮き上がってくることが求められます。村上さんの文章はまさに「何か」がにじみ出ていると言えます。

詫間キャンパス
一般教育科　冨士原 伸弘

平成26年度の読書感想文コンクールは205編の応募を得た。その中から最優秀に情報工学科3年安藤翼「『平和の世紀を願って』を読んで」と電子システム工学科1年（6組）高橋翔「予想検索からの逸脱」。優秀に情報工学科3年入江桃子「忙しい人生を過ごす」と電子システム工学科2年岩崎友里亜「夢を見て、生きるということ」。そして佳作に情報工学科3年小出友子「犯人と呼ばれる子ども」が選ばれた。最優秀の安藤君は「『あの戦争の中にぼくもいた』を読んで」（2012年）、「『ホテル・ルワンダの男』を読んで」（2013年）に続き3年連続受賞の快挙である。1年目の「特別高等警察」・「神風特攻隊」、2年目の「ルワンダの虐殺」、3年目の今回は香川高専生にとってより身近な「高松大空襲」がテーマとなった。現実社会における「憲法9条改正」問題に触れて若干ヒートアップした箇所も見られるが、「戦争」という重いテーマを冷静かつ正確に表現する筆致は今回も冴えており、多くの審査員から高い評価を獲得することに成功した。審査において同点となり、2編目の最優秀となった「予想検索からの逸脱」は、ネット社会に生きる自分自身を見つめ直した好編。やや文章にたどたどしさがあるものの、自己の体験を丁寧に説明しながらテーマを紡ぎ出していこうとする一生懸命さに心惹かれた。優秀作「忙しい人生を過ごす」は、文章を書くことに慣れた筆者の技ありの一編。心地よく読める文章のリズムが印象に残った。もう一編の優秀作「夢を見て、生きるということ」は、自

分の内面を見つめることで自身の居場所を見つけ出そうとする労作。自己の弱点をさらけ出すのは勇気のいることだが、自虐的になり過ぎず、希望を見つけようとする告白が共感を呼んだ。佳作の「犯人と呼ばれる子ども」は、2010年に映画化もされた話題の小説に挑んだものである。メッセージは読み手に伝わってくるが、最近起こった現実の「女子高生殺人事件」があまりにも強烈に筆者の心を捉えてしまったのだろう。溢れ出す感情を抑えることができずに筆を走らせたため、「読書感想文」としては完成度が低くなってしまった。

26年度の読書感想文コンクールを終え、総括として、残念な報告をしなければならない。以前にも書いたことであるが、今回も「盗作」が発見された。「コピペOK」などというHPの記事を鵜呑みにしてはいけない。「自分自身で書く」文章に誇りを持って欲しい。これは上手下手の問題ではない。「夏休みの読書感想文なんか盗作で構わない」と感じている人は、文章を書く前に、「平気で盗作をする自分」の姿をよく思い浮かべて欲しい。次年度の読書感想文コンクールには期待したい。

入賞作品紹介

〈高松キャンパス　読書感想文〉

優秀賞

「世界一の職人が教える 仕事がおもしろくなる発想法」を読んで

電気情報工学科４年　山田 季美佳

まず前置きとして、私は人生論や教訓を謳った本が嫌いでした。成功者の体験談に同調して、自分も成功できるのだと勘違いしたくないからです。その人と自分は周りの環境も、性格も全部違うのだから意味がないと、このような本を勧められても頑なに拒んできました。本を読むことは、むしろ好きです。ミステリー小説などの文学作品は、時間を忘れて読むことができます。ドラマや映画と同じように、1つの物語として読めるのが楽しいのです。しかし今年の夏休みの課題文は読書感想文を書こうと決めた時、いつも読んでいるジャンルの本では書けないな、と思いました。読む分には簡単、むしろ楽しいぐらいなのですが、何も考えずただ結末を知るために読むだけなので、精々「おもしろかった。」程度の感想しかでてこないのです。そこでどうしようかと考えた時、ふと普段は避けているような本をあえて選んでみるのはどうだろう、と思いました。

私が選んだ本は、岡野雅行さん著の「仕事がおもしろくなる発想法」。なぜこの本を選んだかというと、1つはインターンシップに参加し、来年には就職活動を控えているので、働くということを本格的に意識し始めたから。2つめは、今私が学生生活におもしろさを見出せていないから。今の自分が感想文を書くにはぴったりの本だと思いました。

実際に読んでみると、今まで拒んでいたジャンルのはずなのに、案外すらすらと読み進めることができました。語り口調で書かれていることが読みにくさをなくしているということもあると思いますが、一番大きな理由は、筆者が私達高専生の大半が将来なるであろうエンジニアだからということ。エンジニアになるのならばこのような心持ちで仕事に臨むべきなのだな、といくつも考えさせられる言葉がありました。

まずは、図面が全てではないということ。筆者は、「気持ちは図面に書けない」と言います。確かに、図面通りに作るだけなら、コンピュータであっても同じことができます。むしろ、コンピュータの方が速さや正確さの面で優れているでしょう。しかしその中でもなぜハンドメイドの方が高い価値を持つのかと考えると、人の手でしか汲み取れない気持ちがあり、それを表現できるのもまた人でしかないということなのです。筆者が言うように、どんな仕事でも自分にしかできないことがあると思えば、自然とより良いものを探求できるのではないでしょうか。

そして、筆者の持つ向上心。「成功したらすぐ新しい挑戦をする」という言葉から分かるように、筆者は常にその次を見据えています。何かを成し遂げてもそこで満足しない。いつも自分にはどんなことができるか模索し続けている。インターンシップ先で、「乾いた雑巾を絞るという姿勢で仕事に臨む」と教えていただいたのですが、これはまさしく筆者が実践していることだと思います。この意識こそが、筆者が世界一の職人と呼ばれるようになった所以ではないでしょうか。

「誰もやらないことだから、四六時中考えていても飽きることはない。」と筆者は言います。誰もまだやったことのない未知の世界に挑戦するからこそ、楽しい。何でもないことのように書いてありますが、これってすごく難しいことではないでしょうか。未知の世界に挑戦することは、怖いです。終わりも見えないし、成功するという保証もない。むしろ大きな損害となるかもしれない。でもそう考えて、ふと、これが私の悪い所なのではないかと思いました。私は何をするにしても、まず挑むにあたってのリスクを考えます。それにかかる労力や、周りからの目、そういったマイナスポイントを考えた上で、自分にとって都合が悪ければ挑戦することをやめます。それが私にとってベストな方法だったのですが、もし筆

者の言葉が本当なら、今まで自分はすごく勿体ないことをしていたのではないかと思います。筆者は成功や失敗を考える前に、挑戦すること自体を楽しんでいます。そうやって楽しもうという姿勢で臨んでいるからこそ、仕事がおもしろくなる。逆に言うと私は挑戦する前に逃げてしまっているから、今の生活を楽しむことができていないのではないかと思います。すごく単純なことかもしれないけれど、まずは「挑戦する」という基本的なことからすべてが始まるのだと、改めて考えさせられました。

この本を読み終わった後に感じることは、とにかく楽しむということの大切さ。学校で与えられる課題などは、最初から「楽しくないもの」と決めかかって取り組みがちですが、このように先入観だけで物事を見てしまっていたことが間違いだったのではないかと思います。冒頭の話でもそうです。読んだこともない本に対して、教養本なんて意味がない、と決めつけてしまっている。でも実際に踏み込んでみれば、新しい発見もあるし、おもしろいなと感じることができました。発想の転換をすれば、その中におもしろさを見出すことはできるのではないかと思います。

この本の締めくくりは、「生きている間にチャンスをつかめ！」という言葉。何かを成し得たいならば努力をするべきであるし、努力をしたならばそれが評価されるように自分を売り込んでいかなければいけない。筆者のメッセージは、仕事に就いてからではなく今の自分にも言えることです。常に飽くなき探求心を大切にしながら、チャンスを逃さないように楽しみつつ挑戦していきたいです。

『世界一の職人が教える 仕事がおもしろくなる発想法』
岡野雅行　青春出版社

佳　作

「芸人交換日記」を読んで

電気情報工学科３年　**城井 智弘**

この本を読み終った後、がまんしていた涙がこぼれ落ちてきた。この本を選んだのは、表紙に書かれていた何気無い一文だった。「いま、いちばん泣ける小説。」泣くわけないと本を手に取って購入し、読み始めた。

結成11年目の売れない芸人コンビのイエローハーツの交換日記で話が進んでいく。2人は、「売れる」という明確な夢を持っていた。そしてその夢のために11年間努力をし続けている。もし叶わないかもしれない夢を追い続けるとしたら僕は追い続けるのか、それとも諦めるか。自分に問いかけた。夢が叶ったらうれしい。でも叶わなかったら後に残るのは後悔だけだろう。だったらそんなリスクを背負うのは無理だなと思うと同時にイエローハーツの2人はすごいなと思った。

2人の交換日記のやり取りは、多くのことを教えてくれた。人を思いやること。想ってくれる人がいることの大切さ。つまり、相手を思いやってなにより想ってくれる人がいることに気付くことによって人は人らしく成長できるという事だ。でも、相手を思いやるというのは言葉にするのは簡単だが行動に移すのはすごく難しいことじゃないのかと疑問に思った。その時、小学校の時に言われたことをふと思い出した。「相手を思いやることは、自分を助けることにつながります。」当時は、この意味が理解できなかったけれど6年たった今、そういえばこういうことを言ってたのかなと思う。例えば、友達と遊んでいて道の途中で物をなくしたときに一緒に物を探してくれる人がいる。道に迷ったときに、親切に道を教えてくれる人がいる。しかし、例で挙げたのは人としての最低限の助け合いだと思ったが、最低限の思いやりはできるなとも思った。そしたら、相手を思いやるというのは簡単で自分がその人が困っていることに手を差し出すだけでも相手のことを思いやると言えると考えた。

「夢を諦めるのも才能だ。」と本には書いていた。「夢は叶わないこともあるけれど次の夢を見つけて努力すればいい。」とよく耳にする。僕は、中学校のころソフトテニス部だった。入部したときに2つの目標をたてた。何があっても3年間やりとげるという事とレギュラーになるという事だった。めんどくさがりだったので自分の弱い心に勝つために決めた目標だ。簡単だと思っていた目標だったのに、途中達成できそうもなく苦しんでいた。辞めようと思ったこともあったが続けた。問題から逃げるのではなくて、しっかりと向き合い一歩一歩自分のできることからしていこうと思った結果からだった。どんなに大きな目標でも小さな目標をつみ重ねていけば叶うと思った。でもこの本を読んで本当に人生をかけた夢ができたときに、そしてその夢を諦めなければいけなくなったとき僕はその夢を諦める決断ができるのかと思った。そしたら、「次の夢を見つけて努力すればいい」というのは、夢を諦めた人にとったら酷な話だなと思った。夢を諦める才能という言葉はとても深かった。

イエローハーツのツッコミの甲本は夢を諦める才能を持っていた。彼が11年間追い続けてきた夢を諦めることが出来たのは、家族のことを想い、相方のことを想っていたからだと思う。そして、相方の田中が夢を諦めることを許したのも甲本のことを想っていたからだ。でも、結局人間はどんなに相手のことを考えたって他人のことを100％分かる人はいない。そして他人の人生を勝手に決めたりもできないので自分のことは自分で決めるしかない。そのことを2人とも分かっていて解散したんじゃないかと思った。

「やろうと思っている人は一杯いて、それを実行に移す人はほんの一握りな人です。「やろうと思っていた」と「やる」の間には実は大きな川が流れているんですよ。」という文章もあった。夢は口に出さないと叶わないとよく言う人がいるけれどそれの真理は思っているだけじゃまだ川にすら入っておらず口に出してやっと川に入ったと

いうことを言っているんだとその文章を読んでいて思った。やろうと思うことからやるという実行に移すためにまずは口に出すことから始めそして一日5分でもいいからその思っていることを実行に移したい。そして、自分の本当にやりたいことを見つけ出し夢に向かって努力していきたい。イエローハーツの2人のように自分の人生をかけるような夢を見つけることができたときが人生のスタートラインに立つことだと思う。そして、夢に向かって努力をし続けてその夢を諦めなければいけなくなったとき自分の才能が試されると思う。また、相手のことを思いやることで自分のためになり自分のことを思いやってくれる人のことを大切にすることが大事なんだと学んだ。

『芸人交換日記』 鈴木おさむ　太田出版

〈高松キャンパス　千頁読破記〉

優秀賞

千頁読破記

電子情報工学科２年　**安丸 怜那**

私は計算が大嫌いである。今まで、勉強する教科が増えたり、学習する内容が奥深くなったりしてきた。しかし、どんな教科のどんな学習よりも、計算が嫌いなことは小学校の頃から変わることはなかった。理数系の学校に進学している私が、計算が嫌いだ、というのはとても不思議かもしれない。しかし、それには、はっきりとした理由があるのだ。私が計算を嫌っている理由はただ一つ、「計算ミスをする」からである。必ずどこかで間違え、いつも完璧にできないことから、私は計算に苦手意識を持ち続けてきた。

そこで、数学に関係する本を読むことにした。最初に読んだ「数の悪魔」では、数学の基本的なことを改めて知ることができた。また、この本から、計算は機械的にするものではなく、数学の意味を理解しながらするものだと分かった。

そして、数学の応用問題に手も足も出ず、見たこともない問題に直面すると、硬直してしまうことを克服するため、数学の問題に関係している本を読んだ。問題を解く手順は、教えられていたようでそうでないことに気づくことができた。問題に与えられたヒントを基に、答えを求めていく。その過程で問題を多角的に見ることはとても重要だ。しかし、それだけではまだ不十分であり、式を立てるとき、解くときには公式などが必要になってくる。そして、たくさんの公式の中から適切な公式を選別する能力も必要だ。このことは日常生活にも通じていると思う。数学でたくさんの問題を解いて訓練をすることは、日常生活でたくさんの出来事を乗り越えていくことと似ていると感じた。

数学に関する本を読む、ということに始めは戸惑いを感じていた。今まで読んできた小説とは違うと思ったからだ。その予想通り、読むスピードは安定せず、理解するまでずっと同じ部分を見続けるということがよくあった。また、本を読みながら初めて、なるほど、と独り言を言ったり、メモ帳を取り出したりすることもあった。しかし、今回これらの本を読破したことで、少し視野が広がったのでないかと思う。

数学は、答えが決まっている、はっきりしたものだと考えていた。しかし、その数学の大部分を構成する数字が、摩訶不思議な恐ろしいものに思えた。私たちは数字を操っているようで、本当は操られているのではないかという錯覚に陥りそうになった。数学は、実際に目にみえるものではない。だが、今もまた、見えないものが研究、証明され、新しい公式になっているのだと思うと、数学は生きているのだな、と感じることができる。

『数の悪魔』 エンツェンスベルガー著　丘沢静也訳
晶文社　257頁
『いかにして問題をとくか』 G.ポリア著　柿内賢信訳
丸善株式会社　245頁
『東大の数学入試問題を楽しむ』 長岡亮介
日本評論社　286頁
『超面白くて眠れなくなる数学』 桜井進
図書印刷株式会社　213頁
『超超面白くて眠れなくなる数学』 桜井進
図書印刷株式会社　213頁

佳　作

千頁読破記

機械電子工学科４年　**山本 尚幸**

学年が4年生になり、就職か進学かという自分の人生を決めなければいけない時が近づいてきた。将来について具体的に何も決まっていないことに少し焦りを感じていたので、自分の知識の幅や考え方を育てるために、毎日、数ページでも本を読むようにしている。なので今回の夏休みには千頁読破にしようと思った。しかし、目標は千頁ではなく一週間に一冊、本のジャンルは自己啓発本に固定した。

最終的に10冊、合計で二千二百九十三ページの本を読むことができた。自己啓発本と言っても、コピーライターの人が書いた伝え方の本、サッカー選手の長谷部誠が書いたメンタルの本、リッツカールトンやディズニーのサービスの本、松下幸之助や稲盛和夫の経営の本、人の上に立つ人のリーダー教育の本。様々な人の本を読んだ。どれも分野としては違うが共通して書かれていることが多くあった。そういうことを思うと、結局は、本当に大切なことは全体のうちの数パーセントで、必要な考えは一つの文章でまとめることができるのではないかと思った。それに、自己啓発本といえば、難しいことを書い

ているイメージがあったが、大切なことはとても短く、簡単なことが多かった。それこそ、経営においては、「ウソをつかない」「日本をより良くするために」という言葉がベースとなっていたし、サービスにおいても、「相手のことを考える」ことがベースとなっていた。少し考えれば分かるような、あたりまえなことが実は一番大事だということが分かった。

読んだ中でも特に心に残った言葉がある。稲盛和夫の本でよく出てきた「利他の心」である。利他の心とは、損得で考えたり、自分中心に考える自己の心と真逆の言葉で、相手の利益を優先して考えることだそうだ。きっと今まで生きてきた中で、他人の利益を考えて行動したことが何回あっただろうかと思う。ボランティアや自分に何の得もない行為や偽善といわれる行為でさえ、結局は自分の利益、満足感で動いていると思う。純粋に他人のために動くということは、常に自分の行動を管理でき、責任を持つことができる人にのみできることだと思う。そしてそういう人は必ず人の上に立ち、人を幸せにする力があると思った。げんに稲盛和夫は京セラをたちあげ、数千億の赤字だったJALをたった一年で黒字にした男だ。稲盛和夫が幸せにした人の数は計り知れないと思う。

僕はこの今回の読書でなりたい人間像や、人としてどうあるべきかを少しでもはっきりさせることができたと思う。少なくとも人生の選択肢は増えたと思う。

参考文献

『道をひらく』　松下幸之助
『本田宗一郎からの手紙』　片山修
『稲盛和夫　最後の闘い』　大西康之
『サービスを超える瞬間』　高野登
『ディズニーのリーダー』　福島文二郎
『伝え方が9割』　佐々木圭一
『君の背中を押す言葉』　千田琢哉
『はじめてリーダーになる君へ』　浅井浩一
『その他大勢から抜け出す77の言葉』　東雅美
『心を整える』　長谷川誠

〈高松キャンパス　夏休み体験文〉

優秀賞

踊る阿呆に見る阿呆

建設環境工学科４年　村上 恵実

「ヤットサー！ヤットヤット！」元気な踊り子たちの掛け声が街に響き渡る。今年も徳島が一年の中で一番盛り上がる季節がやってきたのだ。

八月十五日、私は友人と二人で徳島市内へ出かけた。地元の駅から汽車にのり、約一時間、久しぶりに再会した友人と思い出話に花を咲かせた。徳島駅に近づくにつれて、二人の気分は高まった。そう、この日は徳島市阿波踊りの最終日なのだ。

徳島市阿波踊りは、八月十二日から十五日までの四日間行われる。四百年も続く、歴史あるお祭りだ。人口約二十六万人の徳島市に全国から延べ百三十五万人の観光客が集まる。市の中心部の公園や通りに設けられた演舞場やおどり広場、踊りロードなどがメイン会場となり、阿波踊りが繰り広げられる。

私たちは午後から、駅周辺を散策した。どこにいても聞こえるお囃子、そしてぞめきのリズムに心が弾んだ。夜に近づくにつれ、さらに盛り上がりをみせた。私たちは両国橋演舞場の桟敷席で阿波踊りを観覧した。熱気に包まれた会場では、「よしこの」のリズムにのって一気に白熱化する。有名連が躍り込んでくると、観客から「わぁ！」という声があがった。一斉にカメラを向けられた踊り子たちの笑顔は輝いて見えた。しばらくの間、友人と言葉を交わすのも忘れるくらい、目の前で繰り広げられる踊りに見入っていた。「懐かしいなぁ、この感じ。やっぱりしびれるなぁ。」と友人が呟いた。「ほんまじゃな。私ら、見る阿呆になったんやな。」と私は答えた。私は今年、どうしてもこの雰囲気を味わいたかった理由があるのだ。

私は十歳の頃から阿波踊りを習っていた。友人もまた、同じ連で阿波踊りを習っていた仲間だ。笠をかぶり手を高く上げて踊る女踊りより、ハッピを着て腰を低くして踊る男踊りに魅力を感じ、男踊りを習った。先輩のしなやかな踊りを見て、十歳ながらに「もっとうまくなりたい、もっと褒められたい。」という感情が強かった。厳しい練習も休まず通い、家では鏡の前で練習した。なぜ厳しい練習でも続けることができたか。それは、自分の踊りを見てくれる観客の笑顔がパワーとなっていたからだ。どんな会場で踊っても、見てくれている人は皆、笑顔で拍手をしてくれた。私は、そのことがたまらなく嬉しく、大勢の前で堂々と踊ることがいつの間にか快感になっていたのだ。しかし、阿波踊りを続けて九年、去年の夏に私は踊ることを辞めた。高専四年生になる今年の夏は、研究やインターンシップのため夏に踊ることは時間的に不可能となったのだ。九年間、「踊る阿呆」だった私は、

踊らない夏に寂しさを感じた。『踊れないなら、見に行きたい。』そして今年、初めて「見る阿呆」となった。

両国橋演舞場で阿波踊りを観覧したあと、私たちは市役所の通りを歩いていた。すると大きな看板が目に飛び込んできた。「あなたも『にわか連』で踊ってみませんか？誰でも参加可能！あなたが主役です！」私たちは迷わず参加を決めた。集合場所にいってみると、何百人という人が踊り方の講習を受けていた。その中には海外からの観光客も大勢いた。私たちも二十分間の講習をうけ、全員で演舞場に移動した。約五百メートルもある商店街の通りを、大行列のにわか連が踊り歩く。私たちは、その先頭にいた。大勢の観客の前で踊るこの感覚、懐かしさや嬉しさ、そして何よりも楽しさを感じた。私は笑顔を絶やさなかった。たとえ、有名連ではなく自由参加の連でも私の踊りを見てくれている人がいることが嬉しかった。写真を撮ってくださったり、「踊りうまいねぇ。」と話しかけてくださる方もいた。商店街を踊り終わったあと、私はある有名連で笛を吹いている方に呼び止められた。「あんたの踊り見せてもろうたけど、初心者ちゃうなぁ。せっかくそれだけ踊れよんやけん、来年はうちの連で踊ってみんで？」私は涙が出そうだった。そのとき初めて自分の踊りが徳島で認められた気がした。来年の夏は就職活動真っ最中、二年後は社会人となり、ますます徳島に帰る機会が減っていく。徳島の夏を満喫できる最後であろう年に、こんな素晴らしい経験や素敵な出会いがあったことに感謝している。

私にとって阿波踊りとは、一生の財産だ。徳島といえば阿波踊りというイメージが定着しているので、どこへ行っても私は堂々と胸を張って阿波踊りを踊ることができるのだ。

「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃソンソン！一かけ二かけ三かけて、四（し）かけた踊りは止められぬ、五かけ六かけ七かけて、八（や）っぱり踊りは止められぬ！」

そう、踊りだしたら止められない。それが阿波踊りの魅力なのである。

〈詫間キャンパス　読書感想文〉

最優秀賞

「平和の世紀を願って」を読んで

情報工学科３年　安藤　翼

1945年（昭和20年）7月14日午前2時前、アメリカの戦闘機B29、116機は西の空から侵入しました。E46型集束焼夷弾約12000発を落とし、高松市街地の約8割を焦土と化し、1300人を超える尊い命を奪いました。これが、高松大空襲と呼ばれるものです。

実は、僕はこの年になるまで高松空襲と言うものを全く知りませんでした。7月末から高松市役所で開催されている、「高松市戦争遺品展」を見に行き、そこで募金をしてこの本を頂いたのです。せっかく頂いたので、まあ取りあえず読んでみよう、というのが本当のところでした。

軽い気持ちで読み始めましたが、この本の中には、69年前に実際に起こった凄まじい歴史が綴られていました。高松空襲を体験した人、広島で被爆した人、南方で捕虜となった人、ひめゆりの学徒隊だった人、たくさんの人達の手記が載せられていました。知っている地名や建物の名前も多く、あそこでこんな事が・・・。えっ、あんな街中でそんな事が・・・と。身近に感じる分、心に受ける衝撃は大きかったです。

僕の心にまず鋭く刻まれたのは、焼夷弾と言うものの恐ろしさです。焼夷弾は、人を殺すことが目的ではなく、家屋を燃やすのが目的です。1つの焼夷弾から線香花火のような筒が100本ほど出てきます。その中にはゼリー状のガソリンが入っており、着弾するとガソリンが飛び散り一気にそして確実に燃え始めます。高松空襲では12000発の焼夷弾が落とされたので、120万本の筒が飛んで来たことになります。それは、わかりやすく言うと、1m間隔で市街地一面に矢が飛んできたという状態で、とても逃げようがなかったと想像できます。恐ろしい光景だったと思います。地獄だったと思います。筒が刺さり火だるまになった人、防空壕に逃げ込んだために中で蒸せ死んだ人、まさしく地獄絵そのものであったと思います。わざわざ、恐怖や激痛を与えて人を殺す焼夷弾。亡くなったのは殆ど女の人と子どもでした。高松空襲はわずか1時間半余りの間に、全てのものを焼き尽くし、生き残った人をも地獄に突き落としたのです。戦争が生むものは絶望だけだと思います。

「これが戦争なんだなあ」

と、苦くて痛くて辛い感情が僕の心を曇らせました。

この年には、全国で215か所の主要都市で同じような大空襲があったとのことです。広島と長崎に原爆が投下されたことは誰でも知っています。しかし、その他にも日本中の多くの人達が空襲を経験し、地獄の苦しみを体験したのです。

そう言えば、僕達の学ぶ香川高専詫間キャンパスは、詫間海軍航空隊の跡地に建っています。調べてみると、神風特攻隊の基地として302人の若い命が詫間湾を飛び立ち、沖縄戦などのために南の空へ消えて行ったと言うことです。この事実を知る人はかなり少ないですが、これは皆が知らなくてはならない事実だと思います。僕の身近にもこんな悲惨な戦争の痕が残っていたとは驚きです。同じ地で学ぶ者として、僕達高専生は正しい歴史を知っておくべきだとも思いました。

そして終戦後、日本は二度と戦争をしないと誓い、憲法第9条が制定されたはずです。それなのに、今年、憲法9条の解釈を変えると言う理由で集団的自衛権の行使を認める閣議決定がなされました。僕個人は、集団的自衛権の行使には反対です。いかなる場合も武力を行使しないのではなかったのだろうか？同盟国を助けるという大義

名分で武力を行使してもいいのだろうか？政治と戦争は別問題ではないのだろうか？どんな理由でも戦争に加われば、不幸が増えるだけではないのだろうか？疑問しか湧かないのです。これからの日本の未来に影が差したような、そんな気分になってしまいました。

「良い戦争など、ない！」

この本の中で、最も僕の心に残り、そして最も理解できた言葉です。戦争とは人を殺すことなのです。そこに生まれるものは不幸だけで、何も得るものはないのです。どんな理由があったとしても、戦争はしてはいけないのです。この本はそう教えてくれています。戦争体験者の平均年齢が75歳を超え、戦争はこれからますます風化してしまいます。だから戦争体験者は、同じことを皆で一生懸命に伝えてくれているのです。

「戦争は絶対にしてはいけない！」と。

僕はこの本を読むことで、戦争の愚かさと平和の尊さを痛感し、平和への信念は一人ひとりが強く持つべきだと心から感じました。

『平和の世紀を願って』 高松市平和を願う市民団体協議会編

最優秀賞

予想検索からの逸脱

1年6組　高橋　翔

僕は「弱いつながり」という本を読みました。高校生となったことを機に課題図書ではなく、自分で本を探して書いてみようと思い出会ったのがこの本です。

表紙には弱いつながり、その裏には人間関係にとらわれるなと書いてありました。どういう意味なんだろうと興味を持ち読んでみることにしました。

本を手に取った時疑問に思った「弱いつながりとはいったい何か」、その答えはこの本を読むにつれて次第に分かった気がします。

この本には、近頃広く普及したネットについてのこと、そして自分という存在についてが書かれていました。グーグル検索にある予想検索という機能。○○さんならこんなことを知りたいだろうと前もって予想検索をしてくれる便利な機能です。しかし、それはグーグルの予想という枠組みの中で生活をしているということではないか。その統制から逸脱するためには自分の周りの環境を変えるしかない。そうして世界を旅する筆者の経験を交えてつながりについて書かれている一冊です。

僕はこの本を読んでいくつかのことを考えました。

まず、偶然に身をゆだねるということです。

この本ではこのような例があげられていました。芸術に興味の薄い人であっても、観光先に有名な美術館があれば訪れると思います。そこでまったく知らない人と知り合う。

このように偶然出会った、自分のことをよく知らない人がいるとします。そういった人が未知の力を引き出してくれる可能性があると書かれていました。

僕はそれを読んで、自分をよく知っている先生や親のような人の方が能力を引き出してくれるのではないかと思いました。しかし、確かに自分の能力を知らないからこそ、新たなアドバイスをくれることもあると思います。

よく考えれば僕がサッカーを始めたのも知り合ってすぐの友達に誘われたからでした。

僕は親友や先生という存在は重要という考えに変わりはありません。ただ、今回この本を読むことで偶然に身をゆだねた出会いも重要なものだと気づくことができたと思います。

次に考えたことは、欲望と時間についてです。

筆者は旅の移動時間の中で訪れた場所をじっくりと見つめ直します。そしてその場所の詳しいことや次の旅への情報を得たいという欲望を生み出すそうです。そうすることでまた新しい知識を身につけ自分を変えるきっかけとなります。

今やネットで遠くの情報が手に入ります。しかし、それでは調べ終えれば次につながるものは生まれません。だからこそ時間をかけ少しの欲望を生み出すことが大切なのではないでしょうか。

少し話が違うかもしれませんが、僕達も勉強でも部活動でも委員会でもそれぞれで行動を起こし、その後じっくり考える時間を確保することが大切ではないかと感じました。

最後に考えたのは弱いつながりとは何かということです。表紙を見て最初に疑問に思ったことでもあります。

この本には他にも多くのことが書かれていましたが、僕はこう思います。

弱いつながりというのは様々な形であり、自分を変えるためにも必要なもとである。

さきほど述べた偶然に身をゆだねて知り合った人はお互いをよく知らない弱いつながりを持つ人であり、時間をかけて生み出す欲望も次につなげるための弱いつながりであると思います。

それぞれが弱いつながりであり、それが自分を変える鍵である。また、弱いつながりがあるからこそ強いつながりがより強くなるのではないのでしょうか。

『弱いつながり―検索ワードを探す旅』 東浩紀　幻冬舎

優秀賞

忙しい人生を過ごす

情報工学科3年　入江 桃子

この本を読むと、ぶんぶんと振り回されているような、往復ビンタをくらっているような、そんな気持ちになる。恋人と幸せに海を散歩しているかと思ったら、日曜日を一人で過ごしている。一人暮らしを始めたかと思

えば、ふるさとに住む決意をしている。何だかとても自由気ままな生き方を感じる。著者、俵万智の人生は、こんなにも忙しく、ドラマチックなのか。その忙しい人生の四年分がこの本に詰まっているのだが、読んだ後に疲れはない。この本、『サラダ記念日』は、息苦しさなんてものを感じさせない、さわやかな本なのだ。

私は前にもこの本を読んだことがある。たまにふと、「サラダ記念日」という言葉とその響きを思い出して、読みたくなってしまうのだ。多分読むのは二、三度目なのだけれど、覚えている歌はほとんどない。「勝手に赤い畑のトマト」という言葉は覚えていた。あまりにも軽やかで、はじけ飛びそうにさわやかだったから。

この本のテーマは、日常の中の発見だと思う。読んでいると、スナップ写真を見ているような気分になる。誰の毎日にも存在しているけれど、なかなか気付かないもの。それを著者の言葉で切り抜いているのだろう。

この人の目線、言葉、物事のとらえ方はすごい。私とは別の世界に住んでいるのではないかと思うほどだ。私はポストを見たとき、赤くて可愛いなと思う。著者は「待つことの始まり示す色」をしていると思う。同じものを見ていても、こんなにも違うのだ。この人には世界がどんな風に見えているのか、とても気になる。けれど、この人になりたいわけではない。私自身の人生がこんなに忙しくて、毎日多くのことを感じていたら、きっと疲れてしまう。この人の本を読んで、私のとは違う人生を少し体験する。他の人の日常をちらりと覗くような、この感じがいいのだ。

この本は重くない。つまり、言葉がさらりと流れていって、あまり頭に残らないということだ。けれどだからこそ、思い出したときにすぐ読むことができるし、気持ちを軽くすることもできる。何かを洗い流したような、さっぱりした気分になれる。心にずしんと響く、読んだ後じっくり考え込む、そんな本とはまた違った良さがあるのだ。息抜きがしたいとき。少し寂しいとき。そんなとき別の人生を過ごすため、この本を開きたい。

『サラダ記念日』　俵万智　河出書房新社

優秀賞

夢を見て、生きるということ

電子システム工学科２年　岩崎 友里亜

あなたは「夢」を持っているだろうか？いまでもその「夢」を追い続けることができているだろうか？歳をとっていくと、昔から持っていた夢を「叶うはずがない。」と決めつけて夢を捨てている人が多いのではないかと思う。この本は、夢を持っていることのすばらしさ、そして、生きることのすばらしさを私達に教えてくれる、「夢と人生」についての本である。

私も、夢を捨てている人の中の一人だった。私の夢は、ロボットを低コストで造り、誰でも買える値段で売るロボット会社を設立し、一家に一台ロボットがあるのが普通な世の中にすることであった。この夢を中学三年生の高校入試が終わった頃に友人に打ち明けると、「そんなことができるはずがない、現実を見なよ、子供じゃないんだから。」
と言われ、夢を見て、夢を叶えようとすることは子供なのだろうか？と疑問を持つようになった。そして高専に入り、自分の能力を改めて知り、不可能であるという現実を見て、あの時友人が言っていたことは正しかったのだ、と思い、叶わない夢を見続けるのをやめた。この本の主人公も私と同じで、叶わないという現実を知り、夢を捨てた。そして、夢を捨てたまま老いて行くのである。

しかし、主人公は死ぬ間際に「夢を追いかけていた日々が、一番輝いていた」ということに気がついたのだ。私はその場面を見て、なるほどなあ。と思った。実際私は、ロボット会社の夢を捨ててから、学校に行くのがとても楽しくなくなっていたからである。高専に通う意味がわからなくなり、いつも学校をやめたい。と思うようになって、成績もどんどん下がっていっていた。ロボットを造るという夢を捨てて、何も目標がなくなってしまったからだったのではないかと思う。思い返せば、夢を捨てていなかった頃は学校に行くのが楽しみで、ロボットを造る授業が待ち遠しい程だった。

主人公は何かをはじめる時、うまくいくかということばかり、叶えることができる夢かということばかり考えていた。しかし気づいたのだ。そんな事を考えなくても「夢は叶う」ということを。「夢を叶える」ことが大切なのではなく、「夢を見る」ことこそが大切だということを。私はもう一度夢を追いかけようと思った。ロボット会社をいつか設立したい、そう思い生きて行くことが最も大切であることに、気づかされたからだ。

たとえうまくいかなかったとしても、夢を見て、生きること。それが一番輝いているということを、この本から学んだ。この本の主人公は、それに気づいた頃にはもう老いてしまっていたが、私はまだ若い。私にはロボットを造れるような能力は全くなく、皆のような才能もない。ゆえに夢を叶えることはできないかもしれない。しかし、老いるまで夢を見ることはできる。夢を追い続けることはできるのだ。夢に少し近づくことができれば、それでいいではないか。夢を見ることはすばらしいことなのだから。夢を追い、生きているということこそが、人生の輝きなのだから。あなたの人生は輝いているだろうか？夢を見ることが、できているだろうか？

『それでも僕は夢を見る』　水野敬也　文響社

佳　作

犯人と呼ばれる子ども

情報工学科３年　小出 友子

2014年7月26日、長崎県佐世保市でひとつの事件が起こった。15歳の少女が同級生の15歳の少女を殺害したというものだった。新聞やニュースは連日この事件を取り上げ、様々な情報が飛び交った。逮捕された容疑者が精神鑑定を受けるという報道があってからはインターネット上に「サイコパス」や「悪魔」といった言葉が並ぶようになった。

事実は小説よりも奇なり。まさにそのとおりではないだろうか。作中でも13歳の男子中学生が4歳の女の子を殺害しているが、事実よりもずっとわかりやすいことなのではないかと思えた。人を殺すには何であれ理由が存在する。では、この作品の犯人が殺人を犯したのはなぜだろうか。

渡辺修哉は母親を深く尊敬していた。母親が研究している電子工学の話を聞くのが好きだった。しかし、子育てに追われ大学の研究所へ戻ることのできない母親に虐待をくり返された末に両親は離婚。父親に引き取られる。一年後再婚した継母との仲は悪くなかったが、弟の妊娠と同時に距離ができる。この頃から別れた母親への気持ちが強くなり、母親に教わった技術を使い「発明品」を発表するサイトを作る。しかし、母親からのコメントはない。そこで発明品を全国中高生科学工作展に出品し、注目を集めようとする。特別賞を受賞し喜ぶが、同じ日に中学生による毒殺事件が起こる。メディアが連日この事件を伝え、報道が過熱するにつれ渡辺修哉はこう思った。立派なことで新聞に名を載せても母親は気づいてくれない。もしも、自分が犯罪者になれば、母親は駆けつけてくれるだろうか。

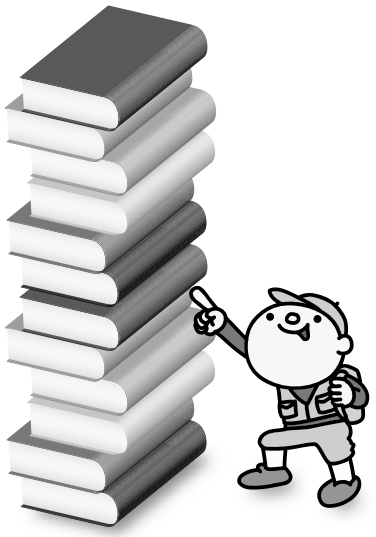
これが事件の動機だ。異常といえば異常だが、筋が通っていると言えなくもない。だからと言って殺人を犯しても良いわけではないが。

さて、佐世保市での事件の動機は何だろうか。報道によると、容疑者は「人を解剖してみたかった」などと言ったらしく、おそらくこれが最終的な動機だろう。しかし、この言葉にたどり着くには長い時間がかかったはずだ。生まれてからずっと「人を解剖したい」と思い続けたわけではないだろう。解剖に興味を持った時期、ヒトの解剖をすることにゴーサインを出した時期。彼女の頭の中で何かがあったはずである。それは何か？私達に理解できるはずもないし、もしかしたら本人にも理解できないのかもしれない。そういった物事をまとめて「心の闇」と呼ぶのだろう。

心の闇という言葉は、小説と実際に起こった殺人に対して、第三者が語った言葉の共通点である。そしてその両方で「心の闇を抱えている子どもが殺人という恐ろしいことをやるのだ」と語る。これは間違いだ。子どもはすべて等しく心の闇を持っている。殺人者には心の闇があって、万引きやいじめをする子にはないと言えるだろうか。

殺人といじめは似ている。どちらも加害者と被害者が存在し、どちらも被害者が傷つけられる。異なる点が出てくるのは、それが発覚した時だ。殺人は何があろうと加害者に責任があり、厳しい罰を受ける。いじめの場合、不思議なことに責任を問われるのは学校なのだ。小、中、高、さすがに大学のことはわからないが、三つ目まではいじめが発覚したとき事実上罰を受けるのは学校であり、校長であり、教師なのだ。加害者本人が厳しい罰を受けることは少ない、というか本人を特定するのが難しいのだろう。

だからなのか「いじめはいじめられる方が悪い」という意見が絶えることがない。いじめを苦に自殺した学生に対しても「いじめ程度で自殺する奴は、これから先も生きて行けるような奴じゃないので死人で正解」などと書き込まれた掲示板も、ネット上で容易に見つけることができる。

心の闇を持つ子どもを探すのではない。子どもは皆、始めから持っているのだから。大人はそれをほんの少しでも意識すべきだ。そして心の闇に子どもが飲まれないように働きかけることが大切だと思う。普通の子だからと言って放っておかないで。問題児だからと言って匙を投げないで。

『告白』　湊かなえ　双葉社